情報通信技術を用いた交際相手からの暴力

: 経験頻度と被害者の行動への影響

○竹澤みどり

(富山大学)

キーワード: 交際相手からの暴力、情報通信技術

A Study of the Prevalence and Effects of Intimate Partner Violence Using Information and Communication Technology

Midori TAKEZAWA

(Univ. of Toyama)

Key words: Intimate Partner Violence, Information and Communication Technology

目 的

近年、インターネットや携帯電話をはじめとする情報通信技術 (ICT) は若者の間に広く浸透し、多くの人が他者とのコミュニケーション手段として活用している。それに伴って、恋人による ICT を用いた暴力、特に精神的暴力が増えており、ICT を用いない暴力よりも容易に用いられやすいことが指摘されている (Melander, 2010)。今後ますます増加すると考えられるこのような新しい形態の交際相手からの暴力 (IPV) の予防啓発のためには、その特徴や影響の把握が重要であるが、未だ研究が少ないのが現状である。そこで、本研究では、IPV の新しい形態の一つである ICT を用いた暴力の日本における特徴を把握することを目的とする。具体的には、ICT を用いた IPV 等に関する先行研究で指摘されている主な行為 6 種について、日本における経験頻度およびその影響について検討することとする。

方 法

調査対象者と手続き インターネット調査を実施した。インターネット調査会社「NTT コム オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社」の保有するモニターから、現在または過去に恋人がいるまたはいたことのある 15 歳から 29 歳の男女を対象にインターネット調査を実施し、473 名 (男性 195 名・女性 278 名) を分析対象とした。

調査内容 「携帯やパソコン、インターネット上のサイトを利用して、あなたの言動をチェック (または監視) された事がある」(「言動監視」)、「執拗にたくさんのメッセージを送られた事がある」(「執拗なメッセージ送信」)、「携帯メールやインターネット上の書き込み、メッセージ送信機能等を用いて、あなたを怖がらせたり、侮辱したり、傷つけたりするような内容のメッセージを送られた事がある」(「脅迫・侮辱」)、「あなたのメールや ID 等を用いて、あなたになりすまし、あなたを困らせるような事をされた事がある」(「なりすまし」)、「インターネットを使って、あなたの情報を探し出し、それを用いてあなたを傷つけたり攻撃された事がある」(「私的情報等による攻撃」)、「インターネット上に、あなたが嫌がるような情報や写真をアップされた事がある」(「私的情報の掲載」)の各行為に対する経験の有無について回答を求めた。回答は「恋人からされたことがある」「元恋人からされたことがある」「これまで恋人や元恋人からされたことはない」から当てはまるものを選択してもらった (複数選択可)。さらに、各行為が自身の行動に与えた影響について、自由記述で回答を求めた。その他、性別、年齢、職業、居住形態等についても回答を求めた。

調査時期 2012 年 11 月 2 日～6 日。

結 果 と 考 察

各行為の経験 各行為に対する経験の有無を Table1 に示した。「言動監視」が 6 種の行為のうち最も経験頻度が高かった。

次に、「執拗なメッセージ送信」、「脅迫・侮辱」の順に経験頻度が高く、これらの行為は容易に行われやすいことが推測された。また、現在の恋人からのみではなく、すでに別れてしまっている元恋人からされる場合も多いことが明らかとなった。

Table1 各行為の経験頻度

	恋人からされた事がある		元恋人からされた事がある		これまで恋人や元恋人からされた事はない	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
言動監視	11(5.6%)	29(10.4%)	20(10.3%)	29(10.4%)	167(85.6%)	221(79.5%)
執拗なメッセージ送信	8(4.1%)	3(1.1%)	16(8.2%)	27(9.7%)	173(88.7%)	249(89.6%)
脅迫・侮辱	6(3.1%)	1(0.4%)	8(4.1%)	11(4.0%)	183(93.8%)	266(95.7%)
なりすまし	3(1.5%)	0(0.0%)	3(1.5%)	2(0.7%)	190(97.4%)	276(99.3%)
私的情報等による攻撃	4(2.1%)	1(0.4%)	2(1.0%)	4(1.4%)	190(97.4%)	273(98.2%)
私的情報の掲載	2(1.0%)	0(0.0%)	3(1.5%)	6(2.2%)	191(97.9%)	272(97.8%)

行動への影響 6 種の行為中その行動への影響に関して 40 以上の記載のあった以下の 2 種の行為について KJ 法を用いてカテゴリ化した。「言動監視」について、恋人または元恋人からされた事があると回答した 89 名中 74 名が回答していた。全記述数は 74 であった。KJ 法の結果、5 カテゴリーが抽出された (Table 2)。「ICT 利用制限」に関する記述が最も多く、この行為によって被害者の行動が制限される場合が多いことが示された。「執拗なメッセージ送信」について、恋人または元恋人からされた事があると回答した 54 名中 44 名が回答していた。全記述数は 44 であった。KJ 法の結果、8 カテゴリーが抽出された (Table 3)。男性では「影響なし」が最も記述数が多く、女性では「関係回避」「疎遠」に関する記述数が多かった。特に女性は相手とのかかわりを減らすことでこのような行為に対処していると考えられた。どちらの行為についても、影響がなかったと感じている人が多い一方で、行動が

制限される
などの好ま
しくないと思
われる影
響を感じて
いる場合も
あり、両
者の違い
は何に起
因するもの
なのか、
今後さら
なる検討
が必要であ
ろう。

カテゴリー名	男性	女性	合計
ICT 利用制限	10 (45.5%)	19 (36.5%)	29 (39.2%)
影響なし	7 (31.8%)	14 (26.9%)	21 (28.4%)
相手への気持ちの冷め	1 (4.5%)	12 (23.1%)	13 (17.6%)
ICT 利用を隠す	4 (18.2%)	2 (3.8%)	6 (8.1%)
その他	0 (0.0%)	5 (9.6%)	5 (6.8%)
合計	22	52	74

カテゴリー名	男性	女性	合計
影響なし	7 (36.8%)	3 (12.0%)	10 (22.7%)
関係回避	2 (10.5%)	7 (28.0%)	9 (20.5%)
疎遠	3 (15.8%)	6 (24.0%)	9 (20.5%)
無視	2 (10.5%)	4 (16.0%)	6 (13.6%)
従う	2 (10.5%)	2 (8.0%)	4 (9.1%)
落ち込む	1 (5.3%)	2 (8.0%)	3 (6.8%)
第3者との関わり減少	1 (5.3%)	1 (4.0%)	2 (4.5%)
不安	1 (5.3%)	0 (0.0%)	1 (2.3%)
合計	19	25	44

付記 本研究は日本学術振興会科研費 (課題番号 24730572) の助成を受けて行われた。